

論壇

画期的な新薬は高額も

医薬品への支払いをどこまで保険でカバーするのか。これは今後日本の医療財政を考える上で重要な論点となっている。医薬品の重要性についてはあえて説明するまでもないだろうが、同時にその費用負担が大きな課題となっている。

医薬品の技術進歩には目を見張るものがある。少し前には治療が困難であると言われていた病気が、画期的な新薬によって治るケースがしばしば報道されている。C型肝炎への抗ウイルス剤療法や、一部の皮膚がんにも有効である

伊藤 元重 (国際経済学) 学習院大教授

と言われるがん免疫治療薬「オプジーボ」などは、報道で耳にした読者も多いだろう。

こうした画期的な薬が世の中に出ていることは素晴らしいことだ。ただ問題は、その費用である。1人の患者の治療に数千万円もかかることもある。それだけの研究開発の費用がかかっているのだ。

医療保険による薬剤費負担

とされるのは、その本来の目的に沿ったものである。患者にとってみれば、その薬を使えるかどうかは生死に関わる問題である。何としてでもその薬を利用したいと考えるだろう。保険財政が厳しいのでその薬は保険でカバーできないという判断をすれば、それは「命の値段はいくらか」という大変に難

問題はどこまでその費用を保険で負担するのかということだ。

保険というのは、多くの人がお金を積み立てておき、事故や病気に遭遇した人のためにその保険金を使うという互助制度が基本にある。個人では負担ができないような高額な薬剤費を保険でカバーす

しい問題に直面することになる。ただ、こうした難しい問題が前面に出てくるほど、それでは医療保険財政は適切に運用されているのかという点が厳しくチェックされることになる。人々の健康や命を守るために、ギリギリのところまで保険財政を切り詰めているの

かどつかが問われるのだ。

医療保険による薬剤費の負担の中でずっと話題になっていることがある。市販類似薬の問題だ。処方箋なしで買える市販薬に類似した医療用医薬品だ。よく指摘されるのが、湿布薬のケースだ。ある湿布薬は医療機関なら患者負担は96円だが、同じ有効成分を含む市販薬は251円だそう。市販薬を買うより処方箋を出してもらったほうが患者の負担は軽くなる。ただ、96円の患者負担(3割負担)の陰に、224円の保険側の負担がある。湿布薬だけではない。ピタミン剤や漢方薬などでも、処方箋を出してもらったことで、市販薬よりも安く手に入る薬がある。

市販薬どこまでカバー

高額な薬をどこまで保険でカバー

一するののかという問題があるのと同様に、市販薬で購入できる薬をどこまで保険でカバーするのかという問題もある。どちらも保険のカバーの範囲という問題ではあるが、高額薬剤については命に関わる問題であり、市販類似薬のケースは患者本人の経済的負担の問題である。

新聞報道によると、政府は市販類似薬について患者負担を増やしていくことを検討しているという。場合によっては市販薬で対応できる薬については保険でカバーしないということもあるかもしれない。市販類似薬を利用している人にはうれしくない話だろうが、限られた医療財政の中でどこにお金を使うのか、議論が深められることを期待したい。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。